

## 立身出世の階梯を諦めた人々

—— 章学誠の“紹興師爺”像を中心に ——

山口 久 和

### 要 旨

何炳棣教授のモノグラフ『科举と近世中国社会』は、科举制度がもたらした社会的動向と知識人のイデオロギー上の変化を社会学的手法によって分析した労作である。本論文はまず第一に、紹興師爺と呼ばれた一群の地方知識人に焦点を合わせ、科举制度の下で生きた彼ら地方知識人たちの社会的実態、政治的信念、世界観を明らかにしようとするものである。すなわち本論文は何炳棣教授のモノグラフに対するささやかな脚注たらしとする試みである。

浙江省の紹興は歴代幕客を輩出してきた土地柄として著名である。総じて、彼ら幕客の多くはかつて科举に挑んで落第し、生活の必要に迫られやむなく官庁の専門ブレンとしての経歴を歩んだ人々である。彼らは高位高官の官僚や地方官である幕主に法律家、経済専門家あるいは能筆の秘書（祐筆）といった専門職業人として仕え補佐した。幕主は彼らを「師爺」（先生）と呼んで一応の敬意を払ったが、現実には彼らは公的な官僚ではなく一介の私的な被雇用者に過ぎなかった。儒教的教養を身につけた知識人として、彼らはみずからの社会的地位に懊悩し、それゆえにこそ自己の職務に献身しよう努めた。もしわれわれが前近代中国、こと18、19世紀の中国社会とそこに生きた知識人を理解しようと思うならば、彼ら不遇知識人により多くの関心を注ぐべきであろう。

おもに本論文は乾隆期の卓越した歴史家であった章学誠の書き残した史料を用いて、彼と同郷の紹興の不遇知識人の屈折した意識や価値観と、そこに由来する職業倫理を分析しようとする。

キーワード：幕客，紹興，知識人，科举，師爺

(2006年10月11日論文受理，2006年12月1日採録決定 『都市文化研究』編集委員会)

### 1. 幕客・館師——不遇知識人の処世

清代において士の身分を制度的に保証してくれるものは進士，挙人，貢生，生員といった科举試験に関わる有資格であった<sup>1)</sup>。そうであればこそ，知識人は社会的上昇の階梯を登るために科举に殺到した。進士の名額は一定していないが，清朝二百五十年間を通じて115回行われた会試<sup>2)</sup>の毎回合格者は最大399名（順治十二

年乙未科），最少81名（乾隆五十八年癸丑科）である<sup>3)</sup>。多数の漢人知識人を中央政府や地方行政府に迎え入れる必要のあった順治朝では，合格者数が大体300人を超えていたが，清朝の支配が確立した康熙朝以降になると合格者数は制限され，200人未満が常態となった。この傾向は乾隆朝にいたって一層顕著になるが，いずれにしても極めて狭き門であることに変わりはない<sup>4)</sup>。多くの知識人は社会的上昇の階梯から

滑り落ち、また多くは昇ることを断念せざるをえなかった。科挙の門から閉め出された彼等は知識人としての矜持を保とうとする一方で、生活という厳しい現実と直面した。こうした不遇知識人が向かった道は、学殖と世知に乏しい者は挙業（受験勉強）の初歩を教える塾師や館師といった下級教育者として世を渡り、多少声望でもあれば府州県学の教諭や訓導<sup>5)</sup>となっていささか社会的体面を保った。

この道とはまた別に、挙業とはまったく異種の実務的知識を一から勉強し直し、専門的職業人として世に立とうと志した一群の人々がいた。おもに彼等が習得したのは法律事務や税務に関する実務技能と知識であった。国家運営や行政の上で一等重要なこれらの実務的知識は科挙の際に問われることはなかった。「君子不器」（論語）という言葉に象徴されているように、進士や挙人といった「正途」＝科挙から官途に就こうとする「士」に要求されたのはジェネラリストとしての典雅な所作や古典の教養、詩文の創作能力であり、スペシャリストである必要は全くなかった。しかし「無幕（客）不成衙」の諺があるほど、諸官庁の実際の行政に当たっては、実務知識は必要不可欠であった。だからこそ上は総督巡撫から、下は知府知県に到るまで、実務知識の保有者を私的ブレーンとして抱え、実務を代行させた。しかし事は代行では済まなかった。「天下惟だ胥吏のみ最も安頓し難し。後世上は公卿より下は守令に至る、終に此の輩の圈子を出る能わず。刑獄簿書は其の手に出で、典故憲令は其の手に出ず。甚だしきに至りては兵機の政要、遅速進退、其の手に出でざるは無し。一刻として此の曹無くんば、宰相もまた將に束手せんとす。」<sup>6)</sup> 文化的教養を身に着けただけで高位高官に昇った「正途」出身の官僚も、専門的知識を運用しなければならない現実の場面では幕客の傀儡に過ぎなかった。『東華録』嘉慶九年六月条に嘉慶帝の上諭を載せて「朕 孜孜として治を図り、暇逸するに暇あらず。無奈せん諸臣、身を全うし位を保つ者多し、国の為に弊を祛く者少なし。甚だしきに至りては一事を問い及べば、則ち属司に推し委ね、自ら堂官（長官）は司官（省庁の官僚）に如かず、司官は書吏（胥吏）に如かずと言う。大学士尚

書侍郎より以て百司に至る、皆な唯々諾々として風を成し、而して命を書吏に聴く。惟だ命に是れ従い、一に書吏に任す。是非を転倒し、例案を变幻し、堂官は其の愚弄を受くるも、冥然として争う所の情節と其の為す所の弊竇を知らず、毫も干渉する無し。良に慨嘆すべし。」と官僚の無知につけ込む胥吏（幕客）の弊害に神経を尖らせている。この上諭に言うように、胥吏は行政上の必要悪として確実に王朝国家の政治組織の中に組み込まれていたのである。清初の陸世儀は「天子の與に天下を治むる所の者は士人なり。而るに士人の習う所は、帖括制義、空疏無用の文に過ぎず。其の出身を限り、其の流品を卑しめ、士人君子に並ぶを得ざらしむる者は吏なり。而るに吏胥の習う所は、錢穀簿書、皆な當世の務なり。」<sup>7)</sup>と、吏（胥吏）の職務上の必要存在を認めながらも、士と吏の厳格な社会上の身分差別を主張している。顧炎武は胥吏問題の本質は、「大抵の官は意を政事に留めず、一切之を胥曹に付す。而るに胥曹の奉行する所の者は已往の舊牘、歴年の成規に過ぎず、敢えて分毫も踰越せず。」<sup>8)</sup>と、官僚の実務的知識の欠落と文書主義、前例主義の偏重にあることを厳しく糾弾している。

ここで批判されているのが、俗に刑名師爺・錢穀師爺・折奏師爺と呼ばれる人々である。彼等は主人たる幕主から「老夫子」あるいは「西賓」と尊称され、師爺は幕主を「東翁」「東家」と呼んだ。一見すると、主人とその客分たる賓客の関係のように映るが、実際は雇主と雇人のドライな雇用関係であった。「士」が進士や挙人の有資格者あるいはその候補者とするならば、その資格も持たずまた科挙及第を断念した彼ら師爺の身分は明らかに士ではない。さりとて庶人でもない。この身分的グレイゾーンに置かれた彼等こそが十八、九世紀の知識人のエートスの一端を代表していた<sup>9)</sup>。浙東紹興こそ師爺<sup>10)</sup>をもっとも多く輩出した土地であった。

## 2. 紹興師爺

紹興はいまでこそ経済発展を遂げた沿岸諸都市の典型のように思われているが、前近代に

あつては決して経済的に豊かな地域ではなかった。たとえば、明の王士性は「山陰・会稽・余姚、生齒は繁多、本処の室廬田土、半ば供するに足らず。」であり、このような土地柄が「其の猥巧敏捷なる者、都に入りて都辦と為る、九卿より聞曹細局に至る、越人（浙東人）に非ざるは無し。」<sup>11)</sup>、紹興師爺として世に聞こえた一群の知識人を生み出したという。みずからも紹興師爺の一人であった章学誠<sup>12)</sup>も「吾が郷の山水清遠、其の人敏鋭にして疏達す、地は僻にして人工修めず。土の出す所、土の人を食うに足らず、秀民は業を得ざれば、則ち往往にして文書律令を治むるを以て、官府に托して幕客と為る、蓋し天性然らしむるなり。」<sup>13)</sup>と、紹興特有の風土的事情が「正途」（科挙及第）出身の読書人身分とはそのイデオロギー、倫理観、職業観において微妙な差異と屈折を帯びた非正統的知識人階層の土壌になったことを認めている。

顧炎武は『日知録』の中で明の「戸部十三司の胥算（胥吏）はすべて紹興人」<sup>14)</sup>であったと記しているように、中央官庁において紹興出身の胥吏が活動することが多かった。彼らの旺盛な活動の結果として、中央省庁だけでなく地方官衙にも紹興は多くの幕客幕友を世に送り出した。嘉靖年間の著名な文化人の徐渭は明代の紹興師爺の典型的人物である。清朝に入ると「無紹（興師爺）無くんば衙を成さず」と称されるほど紹興出身の幕客は幕主から争って迎えられた。紹興師爺の面目を伝える興味深い逸事がある<sup>15)</sup>。紹興師爺であった鄒斯道がのちに雍正朝の寵臣に昇りつめることになる河南巡撫の田文鏡の幕客となった。鄒斯道が田文鏡に言った、「公は名総督、名巡撫になりたいですか、それとも尋常の巡撫総督でよろしいのでしょうか。」文鏡が言った、「もちろん名総督、名巡撫だ。」すると鄒斯道が言うには、「それならばすべてを私にご一任ください。私のすることに干渉してはいけません。」文鏡が「それはどうしてか。」と尋ねると、斯道は「私が公のために上奏文を草したとします。私は一字たりとも公にはお見せいたしません。しかしこの上奏文が皇上に奉られた暁には、公事は成ったも同然であります。」文鏡はこの幕客を信頼してすべてを委ね、上奏文にはただ署名するだけであった。

その結果、雍正帝の絶大なる信頼を得ることに成功した。田文鏡の死後、各地の総督・巡撫は幣を厚くして鄒斯道を自分の幕府に招聘しようとした。仕事を丸投げしてもすべてうまく処理してくれるのであるから、これほど重宝な存在はないであろう。紹興師爺の令名はこの鄒斯道によって一層高まったと言える。

幕主に代わって上奏文を始めとする各種公文書を起草するのが折奏師爺である。地方高級官衙や高位の京官に仕える幕客の場合、折奏師爺は師爺の中でもっとも高い地位を占めていた。上記の鄒斯道は清朝でもっとも著名な折奏師爺の一人であった。ついで幕主から重宝がられたのは刑名師爺と錢穀師爺である。刑名師爺はもっぱら刑事と民事案件の処理を担当する。四書五経の経学的知識と詩文の創作能力だけを以て官界に進んだ正統派知識人（正途出身）には法律条文の煩瑣な解釈や過去の龐大な判例などはまったく無知である。ここにあの龐大な『大清律例』や『大清会典事例』等の法令集について隅々まで知悉している刑名師爺が必要となってくるのである。また各級の地方官庁の財政と徴税事務を担当するのが錢穀師爺である。章学誠は同郷の先輩でありかつ座師であった梁国治の言を引いて、「夫れ刑名 慎まざれば、一人を殺すに過ぎず。錢穀にして慎まざれば、當時は覺らず、近くして數十年、遠くして或いは數百年に至り、常に無窮の人、其の流毒を被り、而して自る所を知らざる有り。」<sup>16)</sup>と錢穀師爺の職責如何が數十年數百年後の国家經濟に大きな影響を与えるほど重要性を帯びていることに注意を喚起している。

ではこれら専門職業人である師爺たちはその専門的知識をどのようにして学んだのであろうか。彼らが学んだ学問は科挙の学業（挙業）に対して「幕学」と呼ばれた。挙業には私立の書院や官立の下級学宮が存在したが、幕学を専門に教える教育機関や学校があったわけではない。大体多くの師爺は先祖代々この職業を継承していた。一方、新たに幕学を学ばんとする者は著名な師爺に弟子入りするか、各種官衙の下級職員となって実務を学んだ。一例を挙げてみよう。章学誠の友人であった山陰の蔣五式は、寧波兵備道馮弼の幕客として「刑名家言」をもつ

て幕主に仕える刑名師爺であり、その父蔣四洲、叔父の蔣南衢もともに刑名師爺であった。南衢は幼い時から神童の誉れ高かったが何度も郷試に落第した。家産が傾いてきたので、「国子生」<sup>17)</sup>の身分を買い取り、挙業を放棄することにした。その後、保定の虞氏の館師として子弟の教育に当たり、そこで得た金を元手にして按察使の官署に入り「文書律令」（法律事務）を一年間で習得した。近隣の州や県の招きにに応じて法律事務処理にいかんなく才能を発揮したので、法律事務の煩雑な「劇郡大府」の長官は争って彼を招致した。その結果、蔣南衢の声望はますます高まった<sup>18)</sup>。ここからも分かるように、刑名の実務を習おうとする者は、地方官であれば按察使の官署に、中央官庁であれば刑部の官衙に入って実地研修するのが普通であった<sup>19)</sup>。

刑名を学ばんとする者は『大清律例』『六部處分則例』などの法令集や通俗的な『洗冤録』などの書物を教科書とした。就学期間は大体三年から五年。乾隆時代の著名な紹興師爺であった龔未齋は「千人幕を学び、成る者百人に過ぎず。百人幕（学）を就すも、入幕する者は数十人に過ぎず。（中略）幕を就すに至りても、則ち甚だ難き者有り。一省に只だ此の百十余館（幕主）あるのみ、而して聘を待つ者これに倍す。」<sup>20)</sup>刑名（法律）にしる錢穀（経済）にしる膨大な実務知識が必要とされる幕学の修得が決して容易でなかったことはうなずける。そしてたとえ苦勞して幕学をマスターしても、実際に入幕できる者は半数に過ぎないほどの就職難であった。幕主の招聘をひたすら待ち望んでいる師爺は「擱筆師爺」とか「霉花師爺」（霉壞、カビが生えたのもじり）と呼ばれて揶揄された。

ただ清朝の官僚機構が整備され官僚主義特有の文書重視主義の傾向が顕著となる中期以降になると幕学のマニュアルや指南書が多く書かれるようになる。その多くはやはり紹興師爺の手になるものであった。著名な幕学書を挙げると、呉郡（蘇州）の萬楓江編著『入幕須知五種』、浙江蕭山の汪輝祖著『佐治藥言』『続佐治藥言』『学治臆説』『学治統説』、徐棟編『牧令書緝要』。また紹興師爺の龔良（字は未齋）著『雪鴻軒尺牘』、同じく紹興師爺の許思湄（字は葭村）著『秋水軒尺牘』は幕客の文章規範としてもてはやさ

れた。とくに汪輝祖の『佐治藥言』は幕学の經典として幕客を志す者に読み継がれた<sup>21)</sup>。阮元は「循吏汪輝祖伝」の中で、「天下大なりと雖も、州県の積みたるなり。州県 尽く孝廉の者を得て之を治むれば、則ち永えに治まらん。予れ学治臆説・佐治藥言を読むに、未だ嘗て巻を掩いて太息せずんばならず。願わくば有司の治汪君の若かるべし。」<sup>22)</sup>廟堂の大官が一介の幕学書を絶賛したのである。異例のことに属するであろう。

### 3. 章学誠「記館穀二事」

出世の階梯たる科举及第を断念して総督・巡撫・知府・知県の幕客（師爺）となった者、あるいは長年錬磨してきた時文（八股文）の能力を生活手段に生かすべく有力者子弟の挙業の師匠に就く者、等しく彼らは官僚制度を下支えし、官僚階層の再生産の維持に努めたという意味では、少なくとも十七世紀後半以降の中国知識人社会の一端を担っていたといえるであろう。しかし彼らは自らの社会的地位や境遇にはアンビバレントな感情を抱いていた。すでに挙げた史料の中にそのことがほの見えているが、非正統的知識人の感情をきわめて明瞭に露呈させた興味深い史料がある。章学誠の「記館穀二事」<sup>23)</sup>である。

章学誠は同時代の知識人から「頭巾氣」（書生っぽい）と揶揄されるほどに生真面目この上ない人物である。文学的想像力と詞藻に乏しいのをよく自覚していた彼は数種の干謁詩を除いて生涯ほとんど詩草なるものを残してはいない。その彼にしては珍しく小説家言を弄して非正統的知識人の反実願望を描いてみせたのが「記館穀二事」である。彼はよほど自身の反実願望を表白したかったのであろう。この文章は二つの物語からなる。一つは館師（住み込み家庭教師）、一つは幕客の物語である。

#### a. 館師の反実願望

桐城出身の年老いた明経（北京の国子監の学生）がいた。彼は挙業に励むこと以外世事についてはまったく疎い人物であった。挙業という

ものが知識人から社会や人間に対するホットな関心や興味を奪ってしまうことへの章学誠の批判がここに込められている。さてこの老明経は生活に困窮していたので館師の口を求めている。ある時、一人の薪売りに出会ったので、彼に良い就職口がないかと尋ねた。一介の薪売り風情に就職口を依頼するところに、この明経の世間的迂闊さが表現されている。薪売りがどのような学問をされたのかと問うので、自作の文章（たぶん時文の習作であろう）を示したところ、薪売りはこれなら館師に推挙できると判断した。年収はいかほどお望みか、また遠方に出かける覚悟はあるかと問うと、何事も仰せのままにと明経は言う。支度金を受け取り、旅装を整えて約束の場所に出かけた。そこから薪売りと一緒に北京東部の山中に入ってしまったのであるが、けっして表街道を通ることはなく、また昼間は旅館に留まり夜間に行動した。やがて海岸線に出ると乗船したが、船倉に入れられたので周囲の状況がまったく分からない。風濤を冒してようやく三日目に大きな島に到達した。天津あたりから航海すること三日で到達できる島となると、舟山諸島か台湾かはたまた当時の琉球であろうか。その島には繁華な都邑があり、人々は立派な服装をしていた。薪売りはと見ると、彼は正装に改め馬に跨って先導を務めた。老明経は薪売りに「ここは何処か」としきりに問うと、薪売りは質問することを禁じた。明経一行はやがて宮殿王府と見まがうばかりの大きな建物に到着した。そこには正装した人々が集まり、薪売りに口を揃えて「天子様に拝謁したり館師をお招きしたりするのは容易ではありません。ほんとうにご苦労様でした」と慰労した。薪売りの正体は島の長官の内命を帯びて北京に行き、天子に拝謁すると同時に長官子弟の館師を連れ帰ることであったのである。

客人の老明経と正装した薪売りは門闕で馬から下り、建物脇の小門から中に入っていった。堂々と正門から入ったのではないというところに、館師の微妙な社会的地位が象徴されている。そして別館に至ったが、主人は顔を見せない。ここにも館師は主人の正賓ではないことが暗示されている。薪売りが学生である二人の少年を紹介した。年長は十歳ばかり、年少は八、九

歳、いずれも眉目秀麗の貴公子であった。つぎの日、学生は明経に授業を請い、いままで学んできた学業を先生に見せた。なんとその多くは唐詩や宋論であり、挙業の文（時文）は無かった。また少年たちは午後二時から四時の間は先生の許を離れるのが常であった。老明経が何をしているのかと尋ねると、弓術と乗馬を習っていると答えた。挙業というものに対する当時の知識人一般の複雑な感慨がこの一節に込められている。挙業は出世の階梯を上昇する唯一の手段であっても、知識人の知的好奇心を満足させるような知ではけっしてあり得ない。たとえば明の楊慎は挙業の浅薄を批判してこう述べている。「本朝は經學を以て人を取る、士子は一經の外、通貫する所罕れなり。近日稍や博きに務むるを知り、譁名を以て苟しくも進むも、本原を究めず、徒に末節を事とす。五經諸子は則ち其の碎語を割取して之を誦し、之を蠡測と謂う。歴代諸史は則ち其の碎事を抄節して之を綴り、之を策套と謂う。其の割取抄節の人、已に經に通じ史に涉らず、而して章句血脉は皆な失す。（中略）噫、士習此に至りて、卑下極まれり。」<sup>24)</sup>。しかし立身出世のためには知識人としてのあり得べき知的好奇心はしばらく抑制して砂をかむような時文の彫琢錬磨に励まなければならない。李杜韓白の唐詩も楽しめない、経世済民を論じた宋人の論弁もしばらくはお預け。袁枚のように若くして進士及第を果たした後は好きな詩文三昧の知的生活を送れるものは幸せである。この明経のように年老いてなお挙業に従事しなければならなかった当時の多くの知識人にとって、唐詩や宋論といった正統的学業を修めるこの貴公子のような存在は羨望の対象であつたに違いない。また古代の六芸（礼・楽・射・御・書・数）を学んでいるとおぼしき貴公子は挙業に毒されない理想のエリート教育を受けていることが示されている。当時の館師が生徒に授けていたのはまさにこれと正反対のカリキュラムであったことを思えば、自身も何度か館師の地位に就いたことのある章学誠の反実願望を読み取ることができるであろう。

さて明経が故郷に手紙を出そうとすると、平穩無事を伝える以外は何も書いてはなりません、と生徒が言う。また故郷に送金されたいの

なら書翰に「寄」とだけ記せば結構です。先生がその金子を用意される必要はございません、と。一月余りして故郷から返信が届いた。「一百金を受け取ったが、いま何処にいるのか心配している。」と書いてあった。このようにして一年間で明経は故郷に一千金を送金し、郷里の実家はこれによって生活の安定を得ることができた。しかし居所だけは伝えることを許されなかった。当時の館師の収入はけっして潤沢といえるほどのものではなかった。一千金の年収は優に僻地の知県クラスの年収を超えている。ここにも章学誠の反実願望が吐露されているようで面白い。

だが老明経はどうしても故郷(直接には妻が)が恋しくてならない。すると貴公子はそれなら簡単に解決できますと言い、多くの美女を並べて明経に好きな女性を選ばせた。明経が気に入ったのは豊満な満州風美女と秦晋あたりの産である纏足のほっそりとした美女であった。五代の羅隱を思わせる醜悪な容貌の章学誠にとって生涯美女とは縁がなかったはずである。ここにも彼の反実願望がちらっと顔を覗かせているようで面白い。結局、細腰の美女の尽力で明経は故郷に帰ることができたのであるが、二人の愛妾の同行は許されなかった。帰路にはまたあの薪売りが道案内を務めた。別れに臨んで彼が言うには、「他言は無用ですぞ。もし漏らせばたちどころに首が飛ぶでしょう。」と念を押しした。帰郷してみると実家は富み栄え、子供達はすでに結婚していた。彼らは老明経にいろいろ尋ねたが、明経はけっして真実を明かさなかった。いつも残してきた二人の愛妾を思って涙を流した。ようやく晩年になって、少しずつ真実を打ち明けるようになったと云う。陶淵明の「桃花源記」のモチーフを下敷きにした小説であるが、館師の反実願望と屈折した社会意識を活写した一文であることは確かである。

ところでこの小説の背景には「桃花源記」とは別に、当時の館師や幕客の実態を伝えるもう一つの物語がある。『清稗類鈔』幕僚類につきのような話が載せられている<sup>25)</sup>。雍正年間、会稽(紹興)出身の幕客がいた。ある日突然、贈り物を満載した使者が家にやって来て徐某に入幕を求めた。約束の報酬は高かったが、幕主の

名前は一切明かさない。徐某は訝しんで色々尋ねたが、使者は「質問はご無用です。あとで分かります。決して先生を裏切ることはありません。」と言うばかり。結局、徐某は同意して使者と一緒に出かけた。巨大な建物が幾重にも建ち並ぶ処に来ると、使者は「ここが先生の居所です。日常の身の回りのお世話はお付きの者がいたします。ただ門から外に出てはなりません。出れば御身のためになりませぬぞ。主人は多忙の故、暇な折にお伺いいたします。」とだけ言い終わると行ってしまった。数日すると、徐某のところに案件が送られてきた。見てみると、いずれも各省庁の重要文書であった。一月ほどすると以前の使者がやって来て、郷里に手紙を書くように言いつけると同時に、住所と金子(郷里への送金額)を明記させた。郷里から返事があると開封せずに使者に手渡して検閲を受けた。こうして一年余り、徐某は一步も外に出られないのを恨めしく思った。ある日、こっそり梯子に登って塀の外を見てみると友人の姿が見えたので話しかけた。友人は「いまは詳しい話はできない。夕飯後にお会いしましょう。」と言った。はたして夕暮れ時、友人が徐某のところにやって来て言うには、「貴兄がここに来たのは私が推挙したからです。」と。徐某は「貴方は私に兄弟がいないことをご存知ではないか。老母の面倒はどうすればいいのですか。」と詰問すると、友人はしばし考え込んで言うには、「私は故郷に帰ることはできませんが、あなたには望みがあります。ゆっくり対策を練りましょう。」と。半年余りが経って友人がまたやって来た。彼が言うには、「あなたの願いは叶いました。ただここであった事は内密にして漏らしてはなりません。今後、他人の招聘に応じてもなりません。」と。数日すると果たして迎えの人がやって来て徐某のために旅装を整え郷里に送り返した。これ以後、徐某は二度と幕客の仕事に就こうとしなかった。その後、自分を招聘したのは世宗(雍正帝)であったことを知ったのである。

「世宗 名実を綜格するを以て天下を督し、吏事を肅し<sup>26)</sup>」と称された雍正帝は各地の総督巡撫、各部の尚書侍郎から送られてくる上奏文を実にこまめに読み、その一々に諭旨を下した。

中国歴代皇帝の中でも政務の精勤ぶりという点で一頭地を抜いている。おそらく世人は雍正帝の背後に一群の優れた折奏師爺の存在を想像したのであろう。幕客徐某の話はおそらく作り話であろうけれども、雍正朝の吏事の実際をよく表現している。章学誠の「館師」も『清稗類鈔』の徐某も予期せぬ成功を収めた点で共通しているが、「館師」には正統的知識人でないことの意識の屈折が伴っている。おそらく雍正期の頃から、徐某のような幕客・館師の出世譚が広く流布していたのであろう。章学誠の「記館穀二事」はこれを下敷きにして、しかし成功譚に比重を置くのではなく非正統的知識人の微妙なコンプレックスを描こうとしたのであろう。

#### b. 幕客の社会的地位

浙中（おそらく紹興一帯であろう）に一人の幕客がいた。能力は抜群であったが、性格はすこぶる狷介傲慢であった。幕主からちょっとでも小言を言われると、さっさと荷物をまとめて幕主のもとを辞去するような人物であった。総じて言えば、地方行政の末端事務が煩雑をきわめ官僚機構の文書主義が徹底する雍正期以降、幕主と幕客の関係はやや売り手市場の傾向があったように思われる。汪輝祖は幕主と幕客のあるべき関係を説いてこう述べている。「且つ賓（幕客）と主（幕主）と勢分の臨有るに非ず。合すれば則ち留まる、吾れ固より人に負く無し。合せざれば則ち去る、吾れ自ら己に疚しき無し。もし之（幕主）と争うに去就を以てし、彼終に悟らざれば、是れ誠に与に善を為すべからざる者なり、吾れまた何の愛む所あらんや。」<sup>27)</sup>幕主と意見が対立し、正義が自分の側にあれば幕客は堂々と去るべし言うのである。紹興師爺の一人である龔未齋は、幕主から冷遇されるならば、みずから高く評価してくれる幕主を求めるまでのこと。幕客は「鷓鴣」のように我が身を幕主一人に託し、立身出世して名を揚げるのも自分の力だけではできない存在。だからしてなおいっそう自分を真に必要とする幕主に仕えたい、と師爺の矜持を吐露している<sup>28)</sup>。

さてある満州族出身の能吏が知県となったので、この傲岸不遜の男を招聘し幕客として重用したが、幕客の態度に手を焼いた。そこで一計

を案じ、妖艶な下女に言い含めて幕客を誘惑させたところ、案の定幕客は女に心を奪われた。二人が馴れ合っている真っ最中、幕主が外から入って来た。幕主はわざと偽って怒ったふりをし、刀を振りあげ幕客を殺そうとした。下女は命乞いをし、幕客も叩頭して謝ったが幕主の怒りは解けない。下僕たち全員が取りなしたので、ようやく幕主は怒りを鎮めて許したが、その代わり「死ぬまで自分の奴隷になること。そうすればこの下女をお前に与えよう。仕事は従来通り役所の文案を処理するだけでよい。給金は幕客の報酬ほど出せぬが、飢え凍えることはないだろう。」と条件を出した。幕客は不本意ではあったが、せんかたなく身分契約書を取り交わした。幕主はこの幕客を奴隷として自分の意のままに働かすために芝居を仕組んだのである。

しかし幕主は奴隷の身に墮ちた幕客を優遇した。こうして十数年が経ち、幕主は知県から知州、知府へ出世し、さらには監司に抜擢されることとなった。辞令が下ると、幕客は同僚を招いて大宴会を催した。ところがその宴会が終わると、幕主は厨房の責任者に同様の宴席をもう一度しつらえるように命じたが、主賓が誰であるのかは言わなかった。酒宴の当日、ホールの南向きに主賓の座を設け、そこに奴隷の身に墮ちた幕客を座らせた。事情を知らない幕客は主人の前でいつもの通り手を交ささせ何かご用でしょうかと尋ねた。幕主は他の下僕に命じてこの幕客を無理矢理主賓の座につかせ、自ら叩頭して許しを請うて言った、「先生は私の師爺です。先生が余りにも馴致しがたい性格であったので、やむなく一計を弄して先生を拘束いたしました。先生のご助力が無ければ、私はどうしてこのように出世ができたでありません。先生のご恩はけっして忘れるものではありません。幕客としてお勤めいただいた報酬一萬金はここにあります。先生はもう故郷にお帰りになられても結構です。またこの下女は先生を私のもとに引きと留めた功績があり、すでに先生の妾になっておりますから、奴婢の身分から平民にしてやるのが良いでしょう。」千金を出して嫁入り道具を準備してやり、幕客と下女の身分契約書を焼き捨てた。そして幕主は家人を呼び寄せ主賓の幕客に挨拶させると同時に、いまや

幕客の妾となった下女のために御簾の中に客人用の座を設けさせた。幕客は感極まって涙を流した。幕客は妾を伴って郷里に帰り、貰った報酬を元手に商売をして家は富み栄えた。その後、幕主はさらに顯官に栄達し、幕客はもとの主人と交際を続け、下女は幕主の家を親戚のように訪問したという。当時、幕客は単身赴任するのが原則であったようである。<sup>29)</sup> 赴任先の土地で家族にも看取られぬまま病死する哀れな幕客の末路は章学誠の文章の中に描かれている<sup>30)</sup>。現実には少数の成功者の陰に貧困をかこつ多くの幕客がいたのであろう。この物語も幕客の成功譚として読むべきではない。幕主の策略によってこの幕客が奴隷の身に墮とされたというところに意味がある。つまりこれは幕主から「師爺」と呼ばれ敬意を示されても、結局は幕主の奴隷・下僕に過ぎないという幕客一般の意識を章学誠が戯画化して表現したのである。この屈折した意識は非正統的知識人が共有するものであった。

#### 4. 非正統的知識人の意識の屈折

「記館穀二事」は小説家言であるが章学誠の生活実態に裏打ちされた内容をともなっている。彼はかつて座師の朱筠と梁国治の館師を勤めたことがあり、また刑名錢穀師爺ではなかったが知府知府そして総督巡撫の幕府に入って方志編纂等の特殊技能でもって幕主に仕えた。だがその生活は不安定であり漂泊の生涯を過ごさねばならなかった。「いま則ち借貸 俱に竭き、典質も皆な空し、萬難 再び支うるも、祇だ沿途に托鉢し、青徐梁宋の間に往来し、惘惘として儻來の館穀を待つを得るは、憊れたりと謂うべし。」<sup>31)</sup>と「館穀」生活の不安と窮状を訴えている。しかし彼らをもっとも悩ましたのは生活苦そのものではなく、いかにして讀書人身分にふさわしい矜持を保つことができるかということであった。

章学誠よりやや後輩の龔良（字は未齋）は典型的な紹興師爺である。彼は三度郷試に応じたがすべて落第。龔家は資産家でなかったため、やむを得ず龔未齋は科場を棄て華北の各地で刑

名師爺として身を立てていくことになった。清朝も末期になると刑名師爺は三百代言を弄する存在として「悪訟師」などと呼ばれて世間の嫌われ者となるが<sup>32)</sup>、まだ乾嘉期の頃は職務に忠実で清廉な師爺が数多く存在した。「愚 燕趙に漫遊すること、凡そ三十三年。館に到るの後、足は戸を出でず、身は席を離れず。往来を慎しむは侮慢を遠ざく所以、応酬を戒しむは營求を絶つ所以。而して早（朝）より三更に至る、片刻の暇も有らしめず、以て己に負くこと無き者は人に負くこと無きを期す。」<sup>33)</sup>と述べる龔未齋などはその典型であろう。汪輝祖はその『佐治藥言』の冒頭に「士人は身を以て治を出すを得ず、佐人（幕客）の治を為すは、勢い已むを得るに非ず。然らば歳修の入る所、実は官俸を分かち、また官の禄に在り。人の食を食す、而るに之を謀りて忠ならざれば、天豈に之に福を以ちいること有らんや。」<sup>34)</sup>と、幕客の心構えを掲げている。幕客は幕主に雇用された私的關係とはいえ、幕主の俸給の一部を貰い受けている以上、官禄を授かっている官員と同様に公的立場にある。であるからして、幕客たるものは職務に忠実でなければならぬ。清末のごろつき「悪訟師」とはまったく無縁の厳しい職業倫理が行間にはじみ出ている。これを近代的意義における職業倫理を身につけた有能善良の職業人であると表現してもよいであろう。マックス・ウェーバ流に表現すれば<sup>35)</sup>、彼ら師爺こそ世俗内禁欲を実践した専門的職業人であったと言えよう。

だがその彼にしてなお以下の発言があるのは何故であろうか。「僕 讀書して未だ成らず、家貧しく親老ゆ、已むを得ず俯首して哀を乞い、斂眉して食に就くのみ。況んや幕の榮と為すに足らず、修身立品の暇あらず、耳は尚お人世の炎涼を以て、懷に釋かず。此れ人を侮るに非ず、乃ち自ら侮るのみ。」<sup>36)</sup>。同じ例は先ほど引用した蔣南衢である。彼は遊幕生活三十年、その足跡は天下の半ばに及ぶほど幕客として名を揚げた人物である。だが晩年になって彼は子弟を戒めて「術を擇ぶは慎しまざるべからず、已むを得ずして刑名の書を治む、慎しみて聰敏を待み、時名を能くするを喜ぶ勿かれ。」と論じている<sup>37)</sup>。これほどの成功者にしてさえなお、結局のところ刑名師爺の処世は「不得已」程度



のものでしかなかったということである。清朝の刑名師爺の中で最も成功を収めた点で乾隆期の汪輝祖の右に出る者はいないであろう。その彼が刑名家言を学んで幕客になろうとした際、嫡母と生母は「汝が父嘗て試みに之を為すも、其の不祥を慎む。いま吾が家は三世単伝、何ぞ此の業に堪えんや。」<sup>38)</sup>と引き止めた。大切な一人息子があろうことか幕客家業をすることなど到底許せるものではない、と反対したのである。

そもそも儒教教育の目的は専門知識の修得ではなく、経史の学と詩文の才を兼備した多面的な人間性を開発し、道徳的に完成された「教養人」を育成することにあつた。たとえ官僚となっても、「読書万卷不読律」と云い、「近時又専用法律而忘詩書」<sup>39)</sup>ことは中国の家産官僚の処世訓とは相容れなかった。それ故、法律家的専門職業人（刑名師爺）はその専門的知識の故に「俗吏」として貶下された。黄宗羲はその『明夷待訪録』胥吏篇で「天下の吏は既に無頼子弟の拠る所となる、而して佐貳また吏の出身たり、士人は目して異途と為し与に伍を為すを羞ず。」「正途」出身の士から見れば「異途」出身の胥吏幕客は同類の知識人とは見なされなかった。たとえ刑名師爺として成功を博しても蔣南衢の疎外感は如何ともしがたいものがあつたのであろう。

考えてみれば、あれほど浩瀚な法典編纂の歴史を持ちながら、中国にはついで社会的に自立した法曹身分や法律家階級が成立しなかった。龔未齋は郷里の親戚友人に戒めてこう述べている、「即ち或いは讀書する能わずとも、何ぞ醫と為り、丹青と為り、商賈と為り、農圃と為らずや、また以て仰いでは事え俛しては育つに足れり、拘無く束無きの身と為る。遍く戚友に告ぐ、其の子弟を勗しめ、時に及んで努力し、功名を博取せしめよ。切に學幕を以て讀書人の退歩と為す勿かれ。」<sup>40)</sup>もし讀書して功名（科挙及第）を得ることができないならば、どうして医者となり、画工となり、商人となり、農民とならないのか。これらの職業は父母に仕え子供を養育するに足るものであり、幕客（師爺）のように「拘束」されることのない身分である、と。龔未齋の言葉を補足すれば、幕客は結局のところ「依人作活者」<sup>41)</sup>（寄生的存在）でしかない

のである。これにたいし医者・画工・商人・農民は四民（士農工商）の士人ではないが、社会的にも経済的にも一個の自立した階層である。この自立した身分を棄て社会的寄生体に過ぎない幕客に身を墮とすのは「読書人の退歩」でしかないと忠告している。彼自身がその幕客であつたことを思えば、彼の心中の複雑な思いは察して余りあるであろう。

刑名師爺の宝典とされた汪輝祖の『佐治藥言』あるいは幕学者の文章規範とも目された龔未齋の『雪鴻軒尺牘』などを見てみると、そこには幕学を行政実務の単なる技術であることを超えて幕客という一個の職業身分にふさわしい倫理道徳を確立しようとする姿勢がうかがわれる。「今の所謂幕は猶お古の參軍記室のごとし。第だ經濟才華、今の人 萬に古に逮ばず。然れども刑名錢穀の事、実に官声民命の関わる所たれば、則ち哀矜して喜ぶ勿れ、其の生を求めて得ずして、方めて之に死すべし。幕中の人、当に常に此の念を存し、僅かに輕心を以て鍛煉し、草卒粗略を戒めとなすのみならざるべし。」<sup>42)</sup>幕客はただたんにおのれの職務に忠実であるだけでなく、自己の職責が国家と民生の安危に関わっているという莊重な意識を自覚すべきだと主張している。ここには職業倫理にまで高められた職業観が明瞭に読み取れる。

だが不幸なことに法曹階層の職業倫理の確立は法曹身分の社会的自立までを準備することはなかった。このことは教育方面についても当てはまるであろう。下は村落の社学や書院、そして府州県学、上は京師の国子監に至る各種教育機関において、また有力者子弟の館師として教育現場に従事した人々には世の師表としての厳しい品格が求められた。多くの書院の規約や盟約がそのことを物語っている<sup>43)</sup>。にもかかわらず前近代の中国社会において教育職が自立した社会的身分・階層として存在することはついでなかった。結局、法曹である刑名師爺も教育職である館師、書院の山長・主講、府州県学の教授・教諭・訓導も前近代の中国社会の寄生的存在として終始しなければならなかった。章学誠や龔未齋ら紹興師爺の屈折した意識の由来はここに求めることができるであろう。

## 注

1. 何炳棣著・寺田隆信他訳『科举と近世中国社会』（平凡社，1993）第一章
2. 博学鴻儒科等の特科を除く。
3. 『明清進士題名碑録索引』（上海古籍出版社，1980）
4. 劉兆璜『清代科举』（東大図書公司印行，台北，民国66年）
5. 訓導は秩従八品。歳貢生から昇格して任命，さらに翰林院孔目，州判，外府経歴，外県県丞，州学正および県教諭に昇格することができた。劉子揚『清代地方官制考』（北京紫禁城出版社，1994），張德澤『清代国家機関考略』（中国人民大学出版社，1981）を参照。
6. 『制義叢話』巻七。ちなみに正規の儒教的教養を身につけた「幕客」「幕友」と役所の実務をこなすだけの「胥吏」とは本来別個の社会的存在である。しかし地方官衙の低級幕客を蔑んで「胥吏」と呼び習わすのは清人の文集や小説の常套表現である。
7. 『思辨録輯要』上巻
8. 『日知録』巻八「吏胥」
9. 筆者はかつて，このような階層の知識人の一部から学問そのものを生計の手段とする近代的意味での「学者」（scholar）が出現したこと，そして中国における近代的学問知はまさに彼らによって開拓されたことを論じたことがある。「中国近世末期城市知識分子的変貌——探求中国近代学術知識的萌芽」（JOURNAL OF EAST CHINA NORMAL UNIVERCITY 2004-1, 2004. 3）
10. 紹興師爺に関する近年の専著に郭潤涛『官府，幕友与書生——“紹興師爺”研究』（中国社会科学出版社，1996年），鮑永軍著『紹興師爺汪輝祖研究』（人民出版社，2006年）があるが，筆者は未見。邦文の研究文献には宮崎市定「清代の胥吏と幕友——特に雍正朝を中心として」（『東洋史研究』16-4, 1958年）がある。
11. 『廣志釋』巻五
12. 紹興師爺としての章学誠の経歴については，筆者の論文「近代的予兆与挫折——清代中期一知識分子の思想和行動」（高瑞泉・山口久和共編『都市知識分子的二重視域』上海古籍出版社，2005）を参照されたし。
13. 『章氏遺書』巻十七「汪泰巖家傳」
14. 『日知録』巻八「吏胥」
15. 『清稗類鈔』幕僚類「世宗問鄔先生安否」条
16. 『章氏遺書』巻二十一「梁文定公年譜書後」
17. この「国子生」は貢生，すなわち国子監で学ぶ権利を有する学生のことであり，下級官吏任用の資格を有するものと見なされていた。貢生の身分の売買はすでに明代から行われていたが，三藩の乱鎮圧の戦費を補うため，清朝政府は約二百両で貢生の肩書きを売買し，以後慣例化した。何炳棣『科举と近世中国社会』第一章41-3頁を参照。
18. 『章氏遺書』巻十七「蔣南河先生家傳」
19. 『章氏遺書』巻十七「汪泰巖家傳」を参照。
20. 龔未齋『雪鴻軒尺牘』下巻「答堯芳六弟」
21. 『佐治藥言』（遼寧教育出版社，1998）徐明「序文」
22. 阮元『擘經室二集』巻三
23. 『章氏遺書』巻二十八「記館穀二事」  
桐城有老明經，久困京師，惘惘不知世事，久益為人所厭。輒行街市，見負販驕僕之流，亦拱揖求薦館。市兒多揶揄玩弄之，亦不覺也。一日掛負薪者求館，負薪問所業，懷中出其文示之。負薪為一再閱，言此可館也。問歲需幾何，能遠行否，皆曰惟命，因訂某日會此。及日往，授白金一裹，俾速治行李。刻日於某所偕行由東京路入山僻，又夜行晝宿，其程皆不類通衢。俄陸盡登舟，藏客舟艙，不容外視。舟入大海，風濤壯猛，三日乃達。啓艙出客，則見山島雄壯，人煙稠密。負薪者先上為具輿從，迎於舟次，輿從甚華。負薪者已改裝，冠青金石頂，曳孔雀翎，乘馬前導。斯須入城邑，街巷市塵，類通都鉅鎮，人物冠服，亦多華麗。頻問負薪者此何世界。負薪厲誠無間，自是遂不敢言。俄見宮府若王邸，門闕之下，衣冠輻輳，見負薪者皆勞問曰，謁君延師不易。負薪者如尊卑答之。客於門闕降輿，與負薪由殿旁小門入。歷曲折甚多，乃至別館。主人不見，負薪送兩學生謁師。長者十許歲，次八九歲，皆韶秀入貴介公子。負薪者主觴祭酒，筵宴而散。供給豐贍，器用華美，雖京師王邸不如也。次日學生請業，出其所業，多唐詩宋論，無舉業文。每未申間，即辭師去，問之則云，習弓馬也。月餘學生問師寄書否，客得安身正憂家，答曰幸甚。學生云，此間凡作家書，除報平安外，不得有他言，惟欲寄金錢，則書附寄字，而實無其數，他日取家中回報自知也，書無封函，封則不能寄矣。客入言付之，月餘家信至，言寄

回百金已得，連年以旅困為念，今何處得金，何為不言坐地耶。客見之甚喜，月餘又寄信付百金入前。大約一年可寄千金，家中亦小康矣。惟屢問坐地，不能答。客頗思家，與學生言。答云，此間可來不可歸者，然先生須眷屬，則無難耳。翌日館人請客，至別院，南牖列華榻，上陳棊几，有簿冊一，置筆硯其旁。東房垂簾幕，北壁下置繩床，可五人坐。客北向先據坐榻，館僮取簿揭陳几，媼姆揭簾呼女子名，即有美女應聲出，至五六人輒止。皆迎面參客畢，即命坐北壁繩床，俾客相之。可意則筆注其簿，不注則五人退，由西房入東幕，再呼出應入前。日映蜃窗，滿室燦麗，客炫迷不能自決擇。閱日既多，隨筆點注二人。其一滿洲裝束，豐麗濃艷，名曰芙蓉。其一如秦晉間纖足輕盈，名曰素梅。遂置別室，嫗婢數人，為司茶灶，如家居焉。然女子情好甚篤，而詰問以主人底蘊，則皆秘不言。久之，客以家故思歸而泣。芙蓉曰，欲歸則前此不當來也，此地絕無來而更能歸者。素梅曰，君似誠篤，或有歸理，試為謀之。數日告曰，諧矣，然歸則不能再來，我二人又不能從，奈何。客弱戀又不能決。再逾年，決志而歸，則前負薪者至。由海道竟抵江南。負薪者臨別誠曰，如洩前言，朝脫口而夕斷頭矣。客歸家，則已殷阜，兒女俱畢婚嫁。家人爭詢所自，竟不敢言。然思兩女子，時時泣下。其妻密叩之，不答。晚歲稍稍洩云。

浙中有幕客，才甚敏給，而性頗乖傲，語言小故，則捲囊辭去。有滿洲能吏為縣，延聘入幕，甚依賴之，而苦其難訓。因飾豔婢誘之，幕果為所動，密與要約，婢又故艱難之，久乃訂盟。正褻狎間，主人自外掩，佯怒持刀，欲兩殺之。婢跪哀求不已。幕不覺，亦屈膝叩頭，不得解。他僕亦還跪代求。良久，主人曰，必欲相貸，須沒身為我奴使。我即以此婢為若給配，所給身價亦足自養。即書券服役，無他言也。否則必兩殺，不能舍矣。從我亦無他役，仍主文案，不勞以粗重也。家中所需，許量資給，可免凍餒，但不得比幕脩爾。幕客初不願，逼於威劫，他僕群相脅誘。顧婢又再三哀勸，一時外怯內慚，又弱所愛，不得已，竟書契投主人，遂為旗下奴焉。其後雖屢悔恨，已無如何。婢又時時宛解之，主人相待，亦稍優他僕。久之，亦遂相安。如是凡十許年，主人由州升府，且擢監司。命下則大置酒，召優伶，遍燕同官。凡數日歡會，最後飭司廚治燕如初，而未知何客。家人請之，則曰但治宴加豐。臨時是有客也。及日，中堂南向，設獨坐，傳命請某先生。家人愕不知所

謂。蓋即前幕久沒奴使中，儕輩亦忘其為故客也。既召至前，叉手請事。主人命兩僕，按捺使上坐，北面叩頭請罪。幕客久居奴使，至是惶悚不寧。主人大笑曰，先生我師事也，安敢相屈向之，所為實緣君性難訓，以小術相鈐束耳。非君之助，余官何得至此，大德安敢忘耶。歷年應奉之脩，且積於此，蓋萬餘金矣。君逐歲支歸，亦逐歲給家用耳。今并合歸君，君亦可不作客游矣。歷年資給君家，免凍餒者，不在此數，即以贖屈君之罪。此婢能留君子，亦大有功，既歸貳室，理宜放良，此後以姻眷往還。仍具千金為嫁奩，出舊契與婢券悉焚之。因召家人，皆以賓禮相見，簾內亦為婢設客座。是日極歡而散。幕客十餘年奴役，心甚慚恨，至是感激，至於泣下。遂將婢歸家，置產治生，家以殷阜。主人後官通顯，幕客南北通問不絕。婢亦時問舊主如姻家焉。

24. 楊慎『升菴文集』卷五十二「舉業之陋」
25. 「世宗聘會稽徐某」條
26. 『清史稿』卷八十一
27. 『佐治藥言』「不合則去」條（遼寧教育出版社，1998）
28. 龔未齋『雪鴻軒尺牘』上卷「與方啓明」第九首
29. 龔未齋『雪鴻軒尺牘』上卷「答王言如」第四十一首
30. 『章氏遺書』卷十七「蔣南河先生家傳」
31. 『章氏遺書』卷二十八「上朱中堂世叔」
32. 紹興師爺の狡猾な手練手管の実態については、徐哲身『紹興師爺逸事』（江蘇広陵古籍刻印社，1998）を見よ。
33. 龔未齋『雪鴻軒尺牘』下卷「寄甘林強」
34. 『佐治藥言』「尽心」條
35. 大塚久雄訳『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』（岩波書店，1991）第二章第一「世俗內的禁欲の宗教的諸基盤」
36. 龔未齋『雪鴻軒尺牘』上卷「與王培元」第二十首
37. 『章氏遺書』卷十七「蔣南河先生家傳」
38. 『佐治藥言』「自序」
39. 『唐宋詩醇』卷三十三・蘇軾「戲子由」
40. 龔未齋『雪鴻軒尺牘』上卷「與家鄉戚友」第七首
41. 龔未齋『雪鴻軒尺牘』上卷「與王培元」第二十首
42. 龔未齋『雪鴻軒尺牘』下卷「寄甘林侄」
43. 典型的例を挙げれば、顧憲成の「東林會約」がある。

## Shaoxing Shiye: Those who had Abandoned Ascending Promotional Ladder

Hisakazu YAMAGUCHI

**The Ladder of Success in Imperial China** by Prof. Ho Piti is a brilliant study that has analyzed social movements and ideological changes of intellectuals, which the imperial examination had brought about, through sociological approaches. Firstly, this paper focuses on a local group of intellectuals called Shaoxing Shiye and then gives accounts of actual societal experience, ideological belief and the worldview of these local intellectuals living under the imperial examination system. Namely this paper intends to be a kind of footnote to Prof. Ho's study.

Shaoxing district of Zhejiang was known as a prominent locality that had produced many brain trusts successively. Generally, almost of them had failed in the imperial examination and by necessity of life assumed the office of brain trusts. They helped governors who were high government officials, or local governors, as a lawyer or economist or writer of public documents and as other specialists. Governors called them as "Master" (Shiye) and showed respect for them. In reality they were not government bureaucrats, but were simple employees. As Confucian intellectuals they had suffered from their social status and for this reason they were dedicated to the exercising of their office. If we want to understand the society and intellectuals in premodern China, especially in the 18th and 19th centuries, we should pay more attention to those intellectuals. Because Chinese society in the premodern era had be propped up by those disappointed intellectuals.

Mainly this paper uses materials which Zhang, Xuecheng, an eminent historian in the Qianlong era wrote as satirical articles, and analyzes the inflected consciousness of those intellectuals and the professional ethics which come from their peculiar consciousness.

Keywords : Brain trusts, Shaoxing, Intellectuals, Imperial examination,  
Master (Shiye)